

エピソード

hideの遺体が東京・築地本願寺に安置された5月3日夕刻から、本願寺周辺はファンであふれ返った。

3日のうちに滞在中のロサンゼルスから急ぎ帰国したYOSHIKIが、4日夕刻、本願寺正門前で異例のメッセージを読み上げた。

「今回、突然、彼の死を聞いてとてもショックです。いまだに信じられない気持ちです。今とてもきれいな顔をして眠っています。何度も起こそうとしましたが、彼は眠ったままです。」

hideはX JAPANの中でも一番冷静に物事を考える人でした。リーダーでありながら、短気で衝動的な僕に、いつもの確かな助言をしてくれました。もちろん、彼は彼自身を見失うこともありましたが、そんなときに必ず僕に電話をかけてきました。バンドのこと、人生のこと、ファンのこと。どんなことでも話し合いました。時には兄のようであり、弟のようでもありました。

ファンの方々も彼の友達も、みんな混乱していると思います。

自分自身もこの悲しみを、とても言葉などでは表現できません。ただ、今こうなってしまった以上、僕らは現実をしっかりと受け止めなければならぬと思います。

「両親をはじめ、今みんな頑張っています。X JAPANのメンバーも頑張っています。だから、ファンのみんなも頑張ってください。いつも僕らを励まし、支えてくれたhideを、今は僕らやファンのみんなの力で素敵に送ってあげましょう。彼の永遠の眠りを温かく見守ってあげてください」

時に言葉を詰まらせ、サングラスの奥の両目からあふれる涙が、頬を伝って落ちるのが見える。

それをハンカチで拭うYOSHIKI自身が、hideの死をいまだに受け止めかねているようにだった。いわゆる「後追」と見られる少女の死があつたため、ファンの冷静な対応を求める異例の声明だ。

最後の言葉が重い意味を持っていたことを、ほとんどの人は気づかなかつた。YOSHIKIは、自らの肩書をこう言つて、声明を締めくくつたのだ。

「X JAPANリーダー、YOSHIKI」

そこには、元の表現がなかった。その理由は、6日の正式な記者会見で明かされることになる。通夜に先立っておこなわれた会見には、向かって左からPATA、YOSHIKI、TOSHI、HEATHの順に座つた。前年大晦日のラストコンサート以来、126日目に顔をそろえたわけだが、hideの姿だけがない。

しかし、X JAPANのファンにとって衝撃的な発言が、YOSHIKIによってなされたのである。

「西暦2000年までには、X JAPANの活動を再開しようと、hideとも約束していました」

連休中とあつて、音楽関係者の多くは海外へ出かけたりしていた。そのため、関係者が協議した結果、通夜は6日、葬儀を7日にとりおこなうことになっていた。

5日の密葬で、そのまま茶毘に付されるのではないかとウワサも流れたが、hideはずつと築地本願寺の本堂で眠っていた。正面中央に髪をピンクに染め、ピンクの衣装をまとったhideの写真が飾られ、愛用してきた22本のギターが写真の前に立てかけられた。

6日午後6時からの通夜には、およそ500人の関係者が参列した。

葬儀・告別式がおこなわれた7日は、前日にも増して多数のファンが築地本願寺を取り囲んだ。

地下鉄築地駅を降りた人々は、本願寺と反対の方向に歩かされて戸惑った。それほどに行列は、正門前から逆のほうへずつと延びていたのである。

午後1時からの葬儀・告別式には、参列者が1000人を超した。

本堂前の広場では、午前中から献花がつづいていた。公式ファンクラブの諸熊聡子さんがハンドマイクを通じて、繰り返しアナウンスしている。

「ファンクラブからのお願いです。hideの祭壇の前では、騒がず、静かに送ってあげてください。騒がれますと献花が中止になってしまう可能性もありますので、hideを最後まで見送ってあげるためにも、皆さんのご協力をお願いします」

前夜は30人単位だった集団を、この日は50人、60人にして献花台の前にガードマンたちが誘導した。気温がじりじりと上がりはじめ、午後にはこの年最高の27・6度にも達した。貧血気味となつて救護所に運ばれる若い女性が増えていき、中には救急車で病院へ運ばれるファンも出てきた。

本堂の中では、ヘッドワックスオーガナイゼーションの代表と、YOSHIIKIの弔辞が読まれ

ていた。

友人代表のYOSHIIKIは、hideの写真をとくとき仰ぎ見ながら、こう述べた。

「hide、今でも覚えているかな。最初に出会った日のこと。お互い自己紹介もせず、前からの知り合いのように、自然に話し始めたね。「オレ、hide。サーベルタイガーやってるんだ」「オレはYOSHIIKI。Xってバンドやってるんだ」

いつか、親友という言葉がふさわしい仲間になっていた。いつか一緒にバンドを組むだろう、そんな予感がしていた。PATAとTAIJIに加え、同級生のTOSHIがそろって、あとはhideの加入を待ただけだった。そんなとき、hideが言った。「YOSHIIKI、オレ音楽やめる」。

「ね、オレと組もうよ」と誘うと、いくつものバンドからの誘いをことわっていたhideが、素直に「オレ、やるよ。きょうからオレもXだ」。そんな言葉に、ひとつだけ約束した。「どんなことがあっても、その決断を後悔させない」と。その後は命がけだった。楽な道ではなかった。世間には、こんな髪を染めた派手な格好のバンドはまだいなかった。どんなところへ行っても、ただの奇抜なバンドに見られた。

お金もなく、公園に泊まったり、エンジンの止まった車を押しつづけた夜。でも楽しかった。一緒にいることが楽しかった。それから5年、オレたちは夢を達成した。嵐のような日々だった。自分を見失ってもhideが支えてくれ、言ってくれた。「YOSHIIKIがいなかったら、今のオレはない」って。今、この言葉を何倍にも返してあげる。「あのとき出会っていなければ、今のオ

レはありえない」

Xではあまりにも多くのドラマがあった。あれは決して解散なんかじゃなかった。ボーカルが辞めて、一時解散とファンに対して責任をとり、2000年までに復活しようと約束した。hideは誇らしげに言った。「オレは今もX JAPANのhide」って。だったら、どうして、オレたちを残して逝ってしまったんだ。

今とてもつらいけど、悲しいけど、最後の言葉を終えなければ。今まで、本当にありがとう。今までも、そしてこれからも、オレが、オレたちが、hideを愛する気持ちは変わらない。メンバーは一生、何があってもX JAPANに変わらない。ここに誓う。だから、いつまでも見守っていてください……」

一拍おいたYOSHIKIは、あたかも歌の旋律をなぞるように、hideの遺影に向かって、最後の言葉を投げかけた。

「hideの分まで、自分たちの本当の、本当の純粋さを信じて、輝いて、輝いて、輝いて……輝いて生きていきたいと思います」

告別式では、ライオンズ日本財団の加藤正見理事長と、全国骨髓バンク推進連絡協議会の海部幸世会長が、hideへの謝辞を述べ、額装した「感謝状」を喪主で父の松本満氏に手渡した。

hide・松本秀人 殿

hideさん、あなたは2年前の夏、骨髓バンクにドナー登録をされたとき、こうおっしゃいま

した。

「言葉ではうまく表現できないから、ただ行動しただけです」

ドナー登録のきっかけは、骨髓移植によって生きる望みを託した少女との交流だったと私たちは知っていました。あなたの彼女への温かい励ましによって、彼女は笑顔を取り戻しました。さらにあなたは、メンバーとともに骨髓バンクへの善意を呼びかけてくれました。あなたの心優しいメッセージは、全国にいるあなたのファンを動かし、多くの若者たちが骨髓バンクのために立ち上がってくれたのです。

かつては、不治の病と言われた白血病など血液の病気も、今では骨髓移植で治る病気になりました。そのためには骨髓提供者がいなくてはなりません。でも、残念ながら提供希望者はまだまだ足りないのが現状です。これからも不断の努力を重ねなければなりません。

そうした中であって、あなたの優しさと勇気は、私たちボランティアに多くの活力を与えてくださいました。ここに、深く感謝の意を表するとともに、これからも白血病などの患者さんを救うために、私たちはこの運動をさらに推進していくことを誓います。

どうぞ、安らかにお眠りください

つづいて、葬儀委員長、松本喪主、元メンバー、親族が、導師の読経の中を焼香した。真由子さんと和子さんも、親族扱いだった。

このあと、『Forever Love』がhideに捧げられた。97年大晦日のNHK紅白歌合

戦で披露したのが最後になったこの曲に、hideが加わることはついになくなった。

YOSHIKIのピアノ伴奏で、TOSHIがマイクを握った。PATAとHEATHはギターを抱えて椅子に座ったが、演奏はしなかった。TOSHIの高音が会場外に流れたのか、うねりのようなファンの声の本堂の中に入り込んできた。

参列者の焼香に移ってからはhideの曲がずっと流されつづけた。途中から焼香台が増やされたものの、1000人もが済ませるまでにおよそ1時間かかった。

最後の別れには、親族を中心に100人が本堂に残った。ひつぎの中のhideは安らかな表情だった。新曲『ピンクスパイダー』のプロモーションビデオでかぶっていたカウボーイハット、たばこ、家族と一緒に写した写真、ギターなどが収められ、hideと親しかった人々が次々と花を埋めていく。

別れを済ませた真由子さんが、ぐったりした表情で、祭壇前の椅子に座り込んだ。かたわらのYOSHIKIが膝を折って、視線を真由子さんと同じ高さにした。真由子さんの左手に、自分の右手を包み込むように添えたYOSHIKIが、小声で語りかけた。

「hideおじちゃんと同じようにはできないけど、これからはYOSHIKIお兄ちゃんやみんなが、真由ちゃんを支えていくからね」

小さくうなずいた真由子さんの両目から、新たな涙があふれ出した。

午後3時40分に出棺となった。斎場に向かうマイクロバスの中に真由子さんもいた。霊柩車を先

頭に車の葬列が本願寺正門前を出ると、詰めかけていたファンのあいだから、悲鳴がわき起こった。

それを耳にした真由子さんが、合わせるように声をあげて泣き出した。

今は葬列の車に乗っているけれど、酷暑の中にいる大勢のファンと自分も同体になりたい。友達同士手をつなぎあって、同じように大声をあげたい。そんな気持ちのあらわれだった。

hideは代々幡斎場で茶毘に付され、生まれ育った横須賀市の自宅に戻ったが、築地本願寺では出棺のあとに献花がつづいていた。

ファンの長蛇の列は、「著名人の葬儀で最大規模」とマスコミが報じた。実際のところ、何人の人々が詰めかけたのか、マスコミによって5万人から10万人まで幅がある。築地警察署は2万5000人と発表しているが、必ずしも正確とは言えない。

正門前のごく限られた地域を除き、ファンは肅々と行列をつくり、炎天下で長時間、献花の順番を待った。

お堅い朝日新聞が、hideの葬儀に関してはなぜか温かい記事を掲載しつづけた。8日付の1面コラム「天声人語」さえもが、ファンの態度を褒め上げたのである。

朝日新聞東京本社は、築地本願寺から五百メートル足らずのところにある。きのうの朝、地下鉄で出勤してきた同僚が言った。「電車の中は、花でいっぱい。香りで息がつまりそうだ」▼本願寺では、自殺した「X JAPAN」の元メンバー、hideさん(三)の葬儀・告別式があった。若者たちが押し寄せ、付近の交通は大渋滞しているという。ちらつと大喧嘩(けんそ)を予想しつつ、寺の付近に行つ

てみた。こんなにたくさんさんの茶髪を、陽光の下で見たのは初めてだ。整理の警官多数。暑さか興奮か貧血を起こす者がいて、繰り返し救急車が走る▼花束を持ち、思い思いの黒い衣装、つまり彼ら流の喪服をまとい、hideを模したピンクの髪の毛の人形を抱え、あるいは携帯電話を手にした、献花の長い列ができています。列は寺の正門前から大通りを曲がり、勝鬨橋にぶつかり、隅田川に沿って川岸を上り、佃大橋をくぐり……と、昼過ぎで二時を超えていた。末尾は献花までに推定六時間

▼本社が現在地に移転して十八年になるが、本願寺でこれほど参列者の多い葬儀は記憶にない。出棺の時間帯に再度、すべてが終わった夕刻（献花はまだ続いていたが）にもう一度、出かけた。総合して、強く印象づけられたのは、この日の若者たちの敬虔さだ。何時間も押し黙り、整然と並んでいた。故人を悼む気持ちがあふれていた▼葬儀なのだから当然といえば当然。しかし当然でない、義理だけの葬儀が多いことは、だれもが感じている。私にはhideの音楽はわからないけれど、これらの若者にとつて、とても大事な人だったのだろう。若者たちはまた、だれが言い出すでもなく、ゴミ袋を持ち寄って、吸い殻を拾い缶を集め、きれいに行列の後片づけをした。あちこちに整然と袋が積み上げられた。当然の、すてきな光景▼大喧嘩はなかった。いい葬式だった

hideの遺骨の一部は5月19日、弟の裕士さんらの手で、ロサンゼルスに近いサンタモニカ沖の太平洋に散骨された。残る遺骨は、真由子さんと和子さんも参列した6月19日の四十九日法要で、自宅からやや離れた霊園にある松本家の墓に納められ、永遠の眠りについた。

hideは、法名「秀徳院釋慈音」となった。享年33――。

●不慮の事故だった――あとがきに代えて

本文では、個々の発言や引用文の中での表現は別として、hideの死を「自殺」とは書いてこなかった。確たる証拠があるわけではない。しかし、急逝のニュースがテレビで伝えられたときから「自殺とは違うのではないか」という印象を、私は持っていた。

真由子さんとの交流を知っていたからである。hideが彼女に見せた優しさは、テレビでしか見たことがなかったが、それを具体的な行動のひとつとしてあらわしたドナー登録のとき、記者会見場に顔を出した私は、初めてhideの肉声を聞いた。

「そんなhideが、自らを滅する行動に出るとは考えられない」

多くのファンの直感を、私もまた持ったのである。やがて、所属事務所がマスコミに発表した計報が手に入った。

hideこと松本秀人儀、突然の呼吸困難により5月2日午前8時52分死去いたしました。

本年リリースしたシングル「ROCKE T D I V E」が自己最高ヒットを記録し、それに続く2枚目のシングルリリースを目前に控えておりました。さらにニューアルバムのレコーディング、夏から始まるツアーのリハーサル等を精力的にこなしている中、志半ばにして本日永眠いたしました。長年にわたりますご厚誼を感謝し謹んでご通知申し上げます

間近にいた事務所の関係者ですら、hideの死に戸惑い、どう対応すればいいのか混乱してい

る様子が、この文面には如実にあらわれていた。

ファンとなれば、惑乱するしかなかっただろう。特に、マスコミが一斉に「自殺」と報じたことが、ファンの平衡感覚を失わせてしまった。その後、「事故」の見方をとるマスコミも出てはきたのだが、葬儀前後はおおむね「自殺」一色で、今もその立場をとっているマスコミがかなりある。

私自身、本書の取材当初はこの話題に触れるのはやめようと思っていた。たとえ事故であっても、それを証明することはすこぶる難しい。また、原因を探ろうとすればするほど、関係者の新たな悲しみを誘うことにもなる。それなら、そつとしておいたほうがいいだろうという判断になっていたからだ。

ところが、取材を進めるうちに、状況証拠の積み重ねでもいいから、hideの死が「自殺ではあり得ない」ことを、私なりの見解として示したほうがいいのではないか、という気持ちが高まってきた。

とりわけファンのあいだには、hideの死そのものを「信じたくない」という雰囲気の色濃い。一方で、「死はまぎれもない事実」と受け止め、悲しみから立ち直ろうとするファンも多い。いずれにしても共通しているのは、「絶対に自殺なんかじゃないよね？」という一点だ。

ところが、それを裏つけてくれる情報がほとんどない。むしろ、亡くなった直後には「これが前兆だった」とか「こんな悩みを抱えていた」とか、あたかも「自殺が既定の事実」であるかのようなマスコミ論調がほとんどだった。

中には、泥酔状態のとき「衝動自殺」に陥りやすい病気の一種になっていたのではないかと、という推測記事を掲載した週刊誌もあった。こうなると、細かい周辺情報の分析ができないまま「hideは自殺だ」と、それだけを確信してしまうファンがいてもおかしくない。

だからこそ、いわゆる「後追い」といった行動をとるファンが出てきた。YOSHIIKIが緊急の声明で、現実を直視して自重するようファンに求めたからこそ、かつて自殺した芸能人のときに比べて「後追い」ははるかに少なかったのだ。

それでも、ファンの多くは、釈然としないままの「モヤモヤ」をいまだに引きずっている。「hideは自殺ではなかった」と、納得できるものがほしい……それがあれば、志半ばで倒れたhideの遺志をなんらかの形で引き継ぐことができる。そう考えているように、私には思えてならない。その点、私が取材したファンはみなさん素晴らしかった。現実をしっかりと受け止め、進むべき方向をそれぞれに定め、着実な足どりで前を向いて歩みはじめている。そうすることが、hideの最も望むところだと思いつつたからだ。hideは、彼女たちの心の中で確実に生きつづけていくにちがいない。

ただ、そこまで気持ちを整理しきれないファンのほうが、多数派を占めるのではないかと予測したことが、私をして「状況証拠でもいいから……」と考えさせる契機になったのである。むしろ、「状況証拠しか示せないけれど……」と言ったほうが適切かもしれない。

そこで、私が「不慮の事故説」をとる背景を、あとがきに代えて書き述べたい。

筆頭に挙げられるのは、なんといつても真由子さんとの交流である。本文で書いたように、真由子さんが熱を出した98年3月、夏の全国ツアーを想定して「楽しいことをたくさん考えるんだぞ」と、ロサンゼルスからEメールを送ってきた。亡くなる1カ月前と前だ。

真由子さんに常に付き添っている母の和子さんが振り返る。

「ずっと遠い未来のことではなく、近い将来の計画を打ち明けてくれるのが、いつものhideさんでした。それに励まされて、真由子さんの前向きな姿勢をつづけてこられたんです。夏のコンサートを話題にしたのは、『明日へのメッセージ』にちがいません」

日付が5月2日になった六本木あたりで、アルコールをたしなみながら、hideはコンサートへの期待を熱っぽく語ったという。数時間後の事故が起きなければ、「hideの夏」は間違いなくやってきたはずなのだ。あれだけの思いやりを見せてきた真由子さんに、「明日へのメッセージ」を出しておきながら、それが不可能になる行動をhideがとるはずがない。

シングルCDの発売も次々に予定されていた。亡くなった直後の5月13日に発売された『ピンクスパイダー』のジャケットの中には、hideお得意の遊び心にあふれた「スペシャル怪人カード」とともに、hideのモノクロ写真をあしらった薄手の告知カードが入っていた。

そこには、次のCD『ever free』の発売日（5月27日）や初回特典の怪人カード第3弾、民放ラジオで始まるレギュラー番組の決定告知などに混じって、「ツアースケジュール近日発表」の文字が躍った。

中でもhideオフィシャルファンクラブ「JETS」発足は、問い合わせ・ファンレターのおて先まで書かれている。X JAPANが活動を継続していたころは、メンバーの個人ファンクラブはなかった。そこで、98年4月1日に立ち上げたわけだが、ファンクラブの名称を「JETS」と決めたのは、hide自身だ。

「ファンクラブは飛行機だよ。スタッフが乗務員で、オレはパイロットだな。そして、ファンのみんなを乗客として乗せるから『JETS』というわけさ」

そんなhideが、ファンが確実に混乱し嘆き悲しむ自殺などを、だれにも何も語らないまま実行するはずがない。「ファン思いのhide」は、hideの個人ファンだけでなく、X JAPANのファンだったらみんな知っている。

「今年は、最高の年になりそうだよ」

父の満さんに、hideは携帯電話の向こうでうれしそうに言った。それは、一戸建ての自宅を都内に新築するため、土地購入契約を済ませた4月27日のことだった。hideの帰国がこの日となったため、契約には満さんが立ち会った。携帯電話で、hideはこんなことも口にしてた。

「仕事場は、絶対に地下だよ」

東京の自宅は、マンションの3階だったため、音を出さなければならぬ音楽の創作にはどうにも不便だったからだ。ロサンゼルスの仕事場でも、音を出すため苦情を持ち込まれることが多かっただけに、地下室での創作活動はhideが待望していたものだった。

まさに順風満帆だったのである。そうした環境にあるとき、人間は自殺の「自」の字も、絶対に念頭には浮かべない。

hideの両親にとつても、当然のように「自殺」などとは信じていることができない。そのため、東海林のり子さんが築地本願寺に弔問に訪れて遺体と対面するとき、母の順子さんはごく自然にこんな言葉をかけていた。

「東海林さん、秀人を叱ってやってくださいよ」

当時は詳しい状況がそれほどわかっていたわけではなかったから、いつものようにhideがいたずら心を起こしているうちに誤って死に至ってしまったのではないかと考えたのである。だからこそ、「また、お酒を飲んで、こんなことになっちゃって」というニュアンスが込められていたのだ。では一体、どうしてあのようなことになってしまったのか？

hideは肩こり性であった。頻繁に肩をもんでもらっていた。亡くなる前夜にフジテレビで収録されたインタビューの最中も、盛んに左の肩を右手でもんでいる姿を見せた。もともと肩こり性だったうえ、ギターバンドを左肩にかけていたから、特に左の肩に強いこりを感じていたようだ。

順子さんが振り返る。

「むち打ち症の治療をするときに、アゴを持ち上げる方法がありますよね。私は直接見たわけではないのですが、秀人が自分でそういう方法をとっていたという話はずいぶん聞かされたことがあります」

むち打ち症治療の方法を「牽引療法」という。私もパソコンを使っているが、特に本書の原稿執筆で長時間キーボードを打ち込んでいて、猛烈に肩が張った。アゴを手で持ち上げて首を回すと、確かに少し気持ちがいい。

hideは、あの日も、集中的な収録で肩がこっていたのは間違いない。帰宅してから、少し楽になるうとして、タオルでアゴを吊ろうとした。ふとした拍子に、タオルがアゴから外れて首にくい込んでしまった。だが、したたかに酔っていたので……。

現場を見ている人がだれもないのだから、推測の域を出ないとしても、ドアのノブといえはそう高くない。ただ、hideの仕事場につづいて浴室があり、そこへ入るには高さ20センチ以上の段差がある。そのため、hideがタオルをかけていた浴室のドアノブは、通常的位置よりは少し高いのだが、それにしても「覚悟の自殺」をするには不自然すぎる。

そうした「中途半端」な位置のドアノブにタオルをかけるなど、いくつかの「謎」は、肩こりをとるための方法だったと考えると、すつきり納得できるのだ。

少なくとも私は、それが「最も真相に近い」と考えている。だから、hideの死は「不慮の事故」だったと、とらえているのである。

hideファンの皆さん、この推論を納得してもらえますか？

hideのご両親である満さん、順子さん、さらに貴志さんご一家には、hideが亡くなった

直後の悲しみの時期だったにもかかわらず、出版化への申し出をご了承をいただき、まことにありがとうございました。所属事務所のご協力も得ました。hideがドナー登録をした8月13日の刊行を目指したため、取材・執筆期間は非常に短かったのですが、取材に応じていただいた皆さん、どうもありがとうございます。取材しながらも紙幅の関係で紹介できなかった方々にはおわび申し上げます。また、小学館の桶田哲男、嶋野智紀の両氏にはさまざまなご苦勞をおかけしながら適切な助言をちようだいし、感謝のほかありません。多くの方々のご協力を得て本書は出来上がりましたが、それはhideがつなげてくれた「人の輪」の成果だと思えます。本書では一貫して「hide」と表記してきましたが、これはファンが親しみを込めてそう呼ぶことに倣ったものです。

最後に、hideさんに捧げます。

「優しさと、愛と勇氣をありがとうございます！」

1998年7月

遠藤 允

●付録——骨髓移植&骨髓バンク

まずは骨髓移植の説明だが、最初に血液についておさらいをしておこう。

体の中を流れる血液には、酸素を運ぶ赤血球、体内に侵入した細菌などを攻撃する白血球、出血を止める血小板がある。これらを造っている場所が骨髓だ。骨の真ん中でゼリー状になっていて、おおもとなるひとつの「造血幹細胞」が分裂を繰り返しながら赤血球、白血球、血小板に成長して血管（末梢血という）に流れ出ていく。

ところが、この造血幹細胞がガンとなったり（白血病）、細胞がなかなか造り出せなくなったり（再生不良性貧血）することがある。原因はわかっていないが、薬でかなり治療できるようになってきた。それでも治らない患者に残された治療法が「骨髓移植」である。

移植の方法はそう難しくない。患者の造血幹細胞を放射線や抗ガン剤で死滅させたあと、健康なドナー（骨髄液の提供者）の造血幹細胞を輸血と同じ方法で腕から入れる。ドナーの細胞が患者の体内で新たな血液を造り始め（生着という）れば、移植は成功したといえるが、数日間は抵抗力がゼロとなるため無菌室に入るものの、それでも感染症や骨髓移植特有のGVHD（移植片対宿主病）で命を落とす患者も少なくない。

一方、ドナーも腰の骨（腸骨）に太い針を刺し入れて骨髄液を採取されるため、全身麻酔をかけられる。麻酔が覚めてからの腰やノドの痛みは個人差が大きいが、だいたい3泊4日程度の入院が

必要となる。

だから、正確に表現するなら「造血幹細胞移植」と言うべきなのだが、ずっと「骨髄移植」と表現されてきたため、「骨を切る」といった誤解を生む原因にもなっている。せめて「骨髄液の移植」と言ったほうがいい。

ただ、骨髄移植で最大の問題は、白血球の血液型であるHLA（ヒト白血球型抗原）が適合しなければならぬことだ。適合していないと、激しいGVHDが起きるため移植による治療効果が期待できないからだ。HLAには数種類の「座」があるが、骨髄移植ではA座、B座、DR座と3種類の適合度を調べる。両親から受け継ぐため合わせて6座を調べるが、6座とも合っていたほうがいい。真由子さんの場合、父や姉とは2座の違いだった。

ついでながら、「造血幹細胞移植」としては、末梢血幹細胞移植と臍帯血幹細胞移植もある。末梢血は血管内にわずかながら流れ出る造血幹細胞を時間をかけて採取し、それを患者に移し換えるもので、日本では自家移植（自分の細胞を採取して移植する）にしかおこなわれていない。

このところ急に注目を浴びているのが臍帯血幹細胞移植である。赤ちゃんがお母さんの胎内にいるときは栄養補給のため重要な役割を持つへソの緒も、いったん生まれてしまえばあとは廃棄するだけだった。しかし、このへソの緒に造血幹細胞が濃密に含まれていることがわかり、とりわけHLAの適合度がゆるやかで2〜3座違っても実施できるため、他人同士の移植を含めてすでに世界中で実施されている。

それでは骨髄バンクの説明に移ろう。

骨髄移植の最大の課題は「HLAの適合」だとすでに書いた。兄弟姉妹のあいだでは4分の1の確率で適合する。しかし、3つの座の組み合わせが膨大であるため、他人同士では数百人から数万人にひとりくらいしか適合者が見つからない。

親族の中で適合者（ドナー）が見つかる患者は、全体の3割程度である。残りのうち薬で治る患者を差し引いても、例えば白血病を例にとれば年間6000人前後発病する患者のうち1500人前後は、他人の中からドナーを探さなければならない。

骨髄バンクがない時代には、骨髄移植という治療法が目の前にあるのに、ドナーがいなければかりに座して死を待つしかなかった。あるいは「救う会」をつくって、特定患者のためにドナー集めをする例もあった。しかし、そうした形でドナーが見いだせた例はきわめて少数であった。

そこで考え出されたのが、骨髄バンクのシステムである。

「どんな患者にも骨髄液を提供していい、という善意の希望者のHLAデータを蓄積しておき、骨髄移植を必要とする患者がドナーを求めたとき、患者のHLAと適合する提供希望者の骨髄液を提供する」

これが骨髄バンクの機能だ。

世界で初めて骨髄バンクが出来たのはイギリスで、1974年のことだ。その後、全米骨髄バン

クが発足するなど世界各地で次々と立ち上がっていた。日本では1987年に、互いに知らないまま、わが子が患者の京都と東京の母親が、骨髓バンク設立運動に取り組んだのが始まりになる。

「欧米にはすでに骨髓バンクがあるのに、日本に生まれただけに骨髓移植の恩恵が受けられないのはおかしい」

しかし、日本では関係者の反応がはかばかしくなかった。そこで、公的なバンクが出来る前に民間の東海骨髓バンク、九州骨髓バンク、北海道骨髓バンクが設立された。特に89年10月発足の東海骨髓バンクは55例の骨髓移植を手がけ、公的な骨髓バンクのスタートによって、ほかの2バンクとともにその役割を終えた。

公的な骨髓バンクは、91年12月の骨髓移植推進財団の設立によって可能となった。ただ、日本の場合は複雑な仕組みとなってしまった。

「厚生省主導の下に、骨髓移植推進財団が主体となり、日本赤十字社と都道府県の協力を得て実施する」

これが日本の骨髓バンクを説明する際の厚生省の表現だが、一度では理解できない。しかも、公式には「骨髓バンク」という名称はどこにもない。

簡単に言ってしまうと、骨髓移植推進財団は骨髓バンク関連のPR、患者登録、ドナーコーディネーションを受け持ち、日赤はドナー登録・HLA検査ならびに患者とドナー登録者のHLA検査をすることになっている。都道府県はPR、ドナー登録受け付けを担当する。

つまりドナー登録者にとっては、適合患者が見つかるまでは日赤のお世話になり、見つかったらコーディネーションが始まれば、財団のコーディネーターとのお付き合いになる。

登録場所は全国68カ所の骨髓データセンター(要するに血液センターのこと)と、都道府県の特設保健所である。フラックと立ち寄って受け付けてくれるところも少数ながらあるが、ほとんどは「あらかじめ電話で予約」をする必要がある。受け付け曜日・時間・人数も限られているから、仕事を持っている人にはなかなか厳しい。

それも手伝ってか、当初「5年間で10万人」とされたドナー登録目標を達成するには、7年近くかかった。この数字は「ドナー登録者が10万人いれば、適合者を求める患者の9割にドナーが見いだせる」と試算されたのが根拠になった。しかし、このところ遺伝子レベルでのHLA適合が求められているため、登録者目標は「30万人」に修正された。

登録時の様々なハードルを乗り越えて、ドナーとなった人の感激はひとしおであるらしい。7割以上のドナーが「もう一度提供してもいい」とアンケート調査に答えているが、医師でもない人間がひとりの患者を救ったという精神的な充足感、何ものにも代え難いようだ。

この項目で最後に触れておきたいのは、「ドナー事故」のことである。hideのファンの一部には「骨髓バンクに登録してもいいけど、最近、麻酔の量を医師が間違っってドナーが死んだ事故があった」という誤った情報が流れているらしい。

全身麻酔をかける以上、「全く問題ない」と100パーセントの安全性を強調できないのは当たり前

前だが、ドナーに関わる事故あるいは後遺症といった事柄は、正確に伝えられなければならない。

骨髄移植をめぐる、ドナーが死亡に至った事故は1990年11月に、都立病院で起きた。日本の公的骨髄バンクの発足が91年12月だから、骨髄バンクでの事故ではなく、兄弟間移植での事故である。事故が起きてからドナー（双子の兄弟の弟）の意識は戻らないまま、2年近くたった92年8月に亡くなったが、事故直後に病院が専門家に依頼して調べたものの、結局、原因はわからずじまだった。

血縁者間移植を含め、世界中での骨髄移植はすでに10万例近くに上ると推測されるが、ドナーが死亡した事故はこれとイタリアの計2例である。麻酔は通常、患者の治療のために施されるもので、全く健康な人に施すのは骨髄ドナーくらいだろう。患者の死亡事故率は2万件に1件程度とされるが、骨髄バンクでは「どんなことがあっても、起きてはならないこと」であることは間違いない。

ただ、ドナーへの骨髄液の採取に先立って、かなり詳細な健康診断がおこなわれるものの、現代医学といっても「いまだにわからない部分」というものは多々あるわけで、検診でも見つからないまま骨髄バンクのドナーがいつ不測の事態に直面するとも限らない。

そこで、日本の骨髄バンクは「死亡や重い後遺障害など万が一の場合、最高1億円給付」の保険（掛金は患者負担）に加入している。

骨髄バンクへドナー登録できるのは「20歳～50歳で、家族の同意を得ている健康な人」というこ

とになっている。健康面については、最終的には登録するときの医師の判断となるが、「献血」が可能であれば登録できると考えていい。

登録したい人はどうすればいいのか？

北海道など一部地域では骨髄データセンター（血液センター）に直接行っても登録できるが、ほかの地域ではまず骨髄移植推進財団発行のパンフレット『チャンス』を手に入れる。書かれている内容を理解したら、そこに付いているハガキに必要事項を記入して財団へ送ると、折り返し最寄りの登録場所を教えてください。その登録場所へ「予約電話」をかけて出向き、ビデオによる説明やHLA検査用の採血（約10ミリリットル）を受けて「登録完了」だ。「その後どうすればいいか」は、登録時に説明される。

ただ、受付窓口が場所も日時も限られているなど、登録希望者にはいまだに不満の絶えない事柄もあるが、土・日曜に受け付けるところも徐々に増えており、少しずつではあるが改善に向かいつつある。

よく言われることだが、ドナー登録だけが「骨髄バンクへの協力」ではない。年齢や体調の関係などで登録できない人もいる。ほかに「協力の仕方」としては、骨髄バンク（骨髄移植推進財団）やボランティア団体への寄付、さらには地域ボランティア団体での活動などが挙げられる。

hideは心の中、にいる
から、生きていける気が
した。
だから、いままで。

貴志真由子 (98年7月)

関係団体

●財団法人骨髄移植推進財団

〒160-0022東京都新宿区新宿2-13-12 新宿ISビル8階
電話03-3355-5041 FAX03-3355-5090
フリーダイヤル0120-377-465 (問い合わせ・資料請求用)
ホームページURL:<http://www.jmdp.or.jp/>

●全国骨髄バンク推進連絡協議会

〒160-0005東京都新宿区愛住町23-1 Woody21-9階
電話03-3356-8217 FAX03-3356-8637
フリーダイヤル0120-892-106 (問い合わせ・資料請求用=月~金曜10~17時)
白血病フリーダイヤル0120-81-5929 (患者相談用=土曜10~16時)
ホームページURL:<http://www.marow.or.jp/>
E-Mail:info@marow.or.jp

●メイク・ア・ウィッシュ オブ ジャパン

〒102-0083東京都千代田区麹町1-7 相互半蔵門ビル4階
電話03-3221-8388 FAX03-3221-8380
ホームページURL:http://www.erde.co.jp/wish_japan/
E-Mail:QVH01131@niftyserve.or.jp

●hideオフィシャルファンクラブ「JETS」

〒150-8681渋谷郵便局留 hideオフィシャルファンクラブ「JETS」
電話03-5469-9676 (24時間インフォメーションテープ)
電話03-5469-0315 (問い合わせ=月~金曜12~17時)
「JETS」活動は平成11年6月末で終了の為、入会受付は締め切りました。

●hide with Spread Beaver

ホームページURL:<http://www.live.co.jp/hide/>

●「ファミリーハウス」運営委員会

〒103-0001東京都中央区日本橋小伝馬町11-9
住友生命日本橋小伝馬町ビル5階
電話03-3639-2146 FAX03-3639-2148

※データは98年8月現在のものです。

遠藤 允
ENDO MAKOTO

1946年6月、山口県生まれ。横浜市立大学文理学部を卒業し、神奈川新聞社に入る。社会部、政経部、文化部、整理部などに勤務。1987年退社し、現在フリージャーナリスト、作家。日本文藝家協会会員。横浜市青葉区在住。主な著書に『21歳の別離～中堀由希子 白血病とのたたかいに青春の死をかけて』（学習研究社）、『生命をください！ ルポ骨髄移植』（講談社）、『55人に届きたいのちの贈り物～東海骨髄バンク』（中日新聞本社）、『微笑がえし～白血病とたたかう家族たちの絆』（あけび書房）、『難民の家』（講談社）、『静波の家～ある連続殺人事件の記録』（講談社文庫）などがある。

本書に記載のデータ等は、特にことわりのない限り98年8月現在のものです。

hide 「がんばんだぞ」

優しさと、愛と勇気をありがとう

1998年9月20日 初版第1刷発行

著者 遠藤 允
発行者 山岸 博
発行所 株式会社 小学館
〒101-8001
東京都千代田区一ツ橋2-3-1
編集 03-3230-5600
制作 03-3230-5333
販売 03-3230-5739
印刷所 大日本印刷株式会社

造本にはじゅうぶん注意しておりますが、万一、落丁・乱丁などの不良品がありましたら、制作部あてにお送りください。送料小社負担にておとりかえいたします。
因く日本複写権センター委託出版物の本書の全部または一部を無断で複写（コピー）することは、著作権法上での例外を除き、禁じられています。本書からの複写を希望される場合は、日本複写権センター（☎03-3401-2382）にご連絡ください。

© MAKOTO ENDO 1998 Printed in Japan
ISBN4-09-398331-3